



いしかわの遺跡

古代のお触れ書き - か が ぐん ぼ う し さ つ 加賀郡榜示札 -



津幡町加茂遺跡で、たくさんの文字が書かれた板が出土しました。その大きさは、横幅約61cm、縦幅約23cmあります。すでに墨が失われていたこともあり、文字は木の凹凸によって読むことができました。そこに書かれていた内容などから、この板は「加賀郡榜示札」と名づけられました。

この加賀郡榜示札の出土は、いしかわの古代史を考える上でとても重要な情報を提供してくれただけではなく、日本の古代史を考える上でも注目されています。

加茂遺跡 ドキュメンタリー加賀郡榜示札

平成12年6月8日の晩、石川県埋蔵文化財センターに1枚の何の変哲もない板が持ち込まれた。「ちょっと赤外線カメラで見てくれないか」本田秀生調査員のその一言が世紀の発見への序章であるとは思ってもしなかった。(赤外線カメラは結局役に立たなかったのだが・・・)

「どこから出土したのですか？」
「津幡町加茂遺跡の大溝から」

その板が徐々に乾いてくると、どんどん文字が浮かび上がってくる。最初にはっきりと読み取れたのは、「深見村」の文字、次には「驛」。

その場は一瞬静まり、そして次の瞬間喚起の声に沸いた。
(あの感動は今も忘れることが出来ない。)

深見、そして驛……。深見驛！加茂遺跡は「深見驛」だったのだ。そう想像してもおかしくはなかった。



発見当日の様子

加茂遺跡の発掘調査は平成3年から始まり、これまで大量の墨書土器や和同開珎の銀銭、古代北陸道などの遺構や遺物が見つかった。「官衙^{かんが}関連遺跡」。これまでいろいろ検討される過程で、落ちていた名称に、新たに「驛^{うまや}関連遺跡」というはっきりとした名称を付けることができるようになった瞬間でもあった。

ただ、そう一筋縄にはいかなかった。
そう最初の1行。

「符深見村 郷驛長并諸刀祢等」の部分は最初から読み取れなかった。某郷。いろいろな考え方が浮かんでくるが、今もって明らかになってはいない。

その後は、調査担当者の本田秀生、そして湯川善一、和田龍介を中心としたセンターの文字資料解析チームと国立歴史民俗博物館教授の平川南先生が、この膨大な文字数を誇る板の解読にあたった。

榜示札の文字を読み取るには、板を限界ぎりぎりまで乾かす必要があり、幾度も変形の危機に陥ったが、^う紆余曲折を重ねながら、9月7日、みなさんの前に発表することができました。



加賀郡榜示札が出土した様子

本田秀生調査員のコメント

最初はただの板だと思いました。出土状態の写真撮って取り上げて、板の裏面(文字のあったところ)についた泥を洗っていたときのことでした。びっくりと文字が見える。

そのときは一瞬目の前が真っ暗になりました。これは大変だ。そこですぐに埋蔵文化財センターに持ち帰ろうと思いました。

結果としてはそれがよかったのと、出土時に文字面が下を向いていたのが幸運でした。こういうことはもうないでしょうね。



上から見た平成12年度の調査区



榜示の様子復元図

加賀郡榜示札 Q & A

Q：榜示札の名前は どうして ついたの？

A：実は最初「高札」という名前を考えていました。高札とは、法などを書いて高くかけた板のことを言いますが、榜示札もこれにあたると思ったからです。ただ、高札には禁制のみを書くのが一般的で、また中世以降にみられるものです。そこで文書の中にある「榜示路頭」という文字を取り、さらに加賀郡が出した文書であることから「加賀郡榜示札」と名づけたのです。この榜示には、「掲示する」という意味があります。

Q：誰が誰にあてたものなのですか？

A：加賀郡の郡司が、深見村に住んでいる郷長や驛長、村の有力者にあてたものです。「深見」は万葉集に出てきます。天平勝宝元(749)年に越前国の役人であった大伴池主が、加賀郡の深見村で越中国司の大伴家持を想って歌った歌があります。また加賀郡に置かれた驛として「深見驛」があります。深見村(驛)の詳しい場所については不明でしたが、この発見で加茂遺跡周辺の可能性が強まりました。

Q：いつ書かれたものですか？

A：嘉祥 年 月 七日という発行年月日が書かれています。嘉祥年間は西暦848年から851年のことです。平安時代のことですね。ちなみに加賀国ができたのは弘仁14(823)年のことです。

Q：何文字書かれているのですか？その時代の人には字が読めたのですか？

A：27行、344字確認できました。上下が少し欠けていますので、実際にはもう少し字数が多かったようです。役人として働いている人たちは字を読めたと考えられます。一般の人たちはどうだったのかというと、おそらく読める人はほとんどいなかったでしょう。それは、榜示札のなかに口頭で伝えよという部分があることから分かります。そのような人たちへの伝え方が分かるおもしろい資料と言えますね。

Q：驛ってなんですか？

A：「驛」とは、奈良・平安時代の官道(今の高速道路)に30里(約16km)ごとに置くことが定められていたものです。驛には馬や驛戸(驛の労働力)が置かれて中央政府と地方をつなぐ通信網の役割を果たしていました。驛を使えるのは中央政府諸官庁の急使のみで、一般人が利用することはできませんでした。驛長は驛を管理する人のことです。加賀国には朝倉・潮津・安宅・比楽・田上・深見・横山の7驛が置かれていました。

平成12年度 話題の遺跡講座

日時：平成12年11月19日(日)
会場：石川県立社会教育センター

新発見・北陸道に立てられた古代のお触れ書き 加賀郡勝示札

講師 国立歴史民俗博物館教授 平川 南

津幡町加茂遺跡から出土した「加賀郡勝示札」と、「^{かしよ}過所木簡」と考えられる第6号木簡を中心に文献資料を交えてご講演いただきました。

加賀郡勝示札には、農民らへのさまざまな禁制があり、それが嘉祥年間という9世紀半ばの古代日本の状況を現しているということや、朝廷からの命令が末端まで伝達される方式がわかることなどについて詳しくお話になりました。また、「深見村」は万葉集の中にも見え、それが発掘調査された遺跡と結びつくのは面白いと評価されました。

勝示札の存在は文献資料でわかっていたが、まさか遺跡から出土するとは思っていなかったこと、またそれをご自分の目で見たときの興奮したことについても語られました。



講演される平川南先生



第6号木簡赤外線写真および釈文

道公	往環人
「乙兄羽咋丸」	「丸羽咋郷長官」
二月廿四日	「不可召遂」
男 <small>せ</small> 保長羽咋丸	

第6号木簡は、その内容から過所木簡（通行手形）と考えられ、それが加茂遺跡で廃棄されていたことは、この場所に^{せき}剗（関）が置かれていた可能性が高いと述べられました。

その内容は、表面が「能登国羽咋郷の人が、道路を修繕するために関を越えるので、拘束しないで欲しい。」というもので、裏面には通行する人の名前が記されています。長さは18cmと短く、簡便なものであったのではないかと指摘をされました。

「加賀郡勝示札」と「第6号木簡」から、加茂遺跡は驛の可能性が高くなり、また関としての機能も併せ持っていたのではないかと考えられ、「驛」、「剗」が置かれたのは、加茂遺跡が水陸交通の要の位置にあったことを物語っていることを強調され、その重要性を語られました。加茂遺跡の評価は一步も二歩も進んだものといえます。

発掘された加茂遺跡

(財)石川県埋蔵文化財センター 本田秀生



発見された古代北陸道

平成3年度からの発掘調査の成果について話しました。平成6年度に発見された古代北陸道のことや、奈良・平安時代の建物跡群などの遺構、出土した遺物では和同開珎（銀銭）、墨書土器などスライドを交えた説明がありました。

当日は250人の方々に参加していただきました。話題になった遺跡であるせいか、みなさん熱心に聴いていたように思います。古代の人々の世界を一瞬でもかいま見ることができたのではないのでしょうか？

まいぶん第2回 古代体験まつり

10月28・29日(土)(日)と今年は2日間ありました。29日はあいにくの天気となってしまいましたが、2日間で1,200人の方に来ていただきました。

小さな子ども、年配の方もそれぞれがいろいろな楽しみ方で古代人の知恵とワザを体験されていたようです。さて、その様子を少しのぞいてみましょう。



ベチャ。ヌリヌリ。
(弥生土器野焼きの準備)



いい、こっちをさきにこうやってね。



次はどこへっと。



いい感じやねー。
わたしらうまいんじゃない。



ム、ムズカ
シイ・・・。

パパー。がむばってー。



トン。トン。トントン。



わたしはヒメ。ぼくはヒコさ。



まだまだ若いもんにはまけん。

親と子の遺跡発掘体験教室

今回の体験発掘教室は、

- | | | |
|-----|---------------|----------|
| 第1回 | 小松市千代・能美遺跡 | 7月29日(土) |
| 第2回 | 金沢市畝田・寺中遺跡 | 8月 5日(土) |
| 第3回 | 羽咋市大町ゴンジョガリ遺跡 | 8月19日(土) |

で開きました。



おはようございます。
さあ、今日はいっしょに
がんばりましょう！



えー、この遺跡は、・・・時代です。
土器がたくさん出てくると思
いますので、注意しながら掘っ
てください。今日は暑いので体
には気をつけて・・・。



土器をきれいに洗いま
しょう。そう、われて
いる面は特に念入りにね。

今年の発掘体験教室では、
発掘した結果を記憶と記録
に残していただくために、
報告書(埋メモリー)を作
ることにしました。

自分で掘り出した土器を写真に撮ったり、
拓本をとったりして、難しいこともあったと
思いますが、みなさんなかなかの出来でした。



終了おめでとう。
「こども考古学者」
として認定します。

おっ、なかなか
いい感じ。
もうちょっと
ここをこうして。



第2回 いしかわの発掘展

「人と火と - 暮らしの火 - 」

8月1日(火)~8月31日(木)にかけて開きました。今回の展示では、
人と火をテーマとしました。

人が火と関わってきた歴史を、暮らしの中にある火に焦点をあて
て、火どころ・発火・調理・灯火の4つのパートに分けて、縄文時
代から近世までと、幅広く石川県内の出土品を展示しました。



説明会の様子

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

一向一揆最後の拠点 **鳥越村鳥越城跡**（国指定史跡）

鳥越城跡は、加賀一向一揆の最後の拠点として知られ、手取川とその支流大日川に挟まれた標高312mの丘陵上を利用して築かれています。大日川を挟んだ対岸には、同じく国指定史跡の二曲城跡があります。

鳥越城がいつ頃からあったのかについては、詳しくは分かっていません。落城したのは天正8(1580)年のことで、織田信長の家臣、柴田勝家によって攻め落とされました。その後、一揆方は再び城を奪回したりしますが、最後には鎮圧され加賀一向一揆は壊滅したとされています。

発掘調査は、昭和52(1977)年からの3年間と、平成2(1990)年より史跡整備のため行われています。その結果、本丸跡および二の丸跡から、礎石をもつ建物跡や、堀立柱建物跡が見つかっています。また、ますがた櫓形門、こしぐるわ腰郭には石垣があります。特に首切り谷と呼ばれる空堀に面する石垣は高く険しいものです。



復元された本丸門



本丸の様子

建物跡の多くには、火災にあった跡がありました。出土した陶磁器類には中国製のものがたくさんあり、刀や鉄砲玉といった武器類などもありました。

本丸までは車で登ることも出来ませんが、できればふもとから歩いて登ってみてはいかがでしょうか。戦国時代の気分が味わえるかもしれませんよ。

本丸についたらその景色は絶景です。ここに城を構えた理由がなんとなく分かる気がします。

平成13年4月には一向一揆歴史館がオープンします。鳥越城跡とともにぜひ一度足を運んでみませんか？

交通：北鉄鶴来駅下車 北鉄鶴来駅からタクシーで20分・加賀白山バス白山下行きで20分（釜清水下車）
北陸自動車道小松ICから国道360号線で約30分
お問い合わせ：鳥越村教育委員会教育課 電話 07619-4-2059

- イベント情報掲示板 -

発掘速報会 平成13年3月10日(土)

時間：午後1：20～

会場：石川県立社会教育センター 4F講堂

参加費：無料（事前申し込み不要）

平成12年度に発掘調査された遺跡の成果を調査員がスライドを使って報告します。